

菅原道真と神仙思想

——源能有五十賀屏風画詩をめぐる——

はじめに

『菅家文章』巻五には源能有の五十賀のために制作された五首の屏風画詩が残されている。この詩群には菅原道真自身が成立事情を説明した次のような記序が付されている。

「右金吾源重将、与レ余有レ師友之義。夜過レ直廬、相談言曰、
「巖父大納言、去年五十、心往事留。過レ年無レ賀。此春已修レ
功德、明日聊設レ小宴。座施レ屏風、写レ諸靈寿。本文者紀
侍郎之所抄出、新様者巨大夫之所画図。書先属レ藤右軍、
詩則汝之任也」。談畢帰去。欲レ罷不能。予向レ燈握筆、且挑
（*板本作排。扱内閣文庫林道春本等改）且草。五更欲レ尽、
五首纔成。右軍即書之、以備レ遊宴事。若不レ詳録、難レ可レ
得レ意。題脚且注レ本文、他時断レ其疑惑。故叙レ之。」^①

谷 口 孝 介

この記序によると、寛平六年（八九四）に五十歳になった源能有の五十賀を翌年、寛平七年、『菅家文章』の前後の配列から考えると三月、に行うことになり、その賀宴に設ける屏風のための詩を、能有の息子で「右金吾源重相」つまり右衛門権佐であった源當時に依頼された、というのである。さらに、画材となる「本文」は紀長谷雄が抄出し、長寿を保った神仙の姿は巨勢金岡が描き、詩の浄書は藤原敏行があたったという。ちなみに仁和元年（八八五）、藤原基経五十賀に際してのものである「右親衛平将軍、率レ廐亭諸僕、奉レ賀レ相国五十年」。宴座後屏風画詩。五首 174～178（菅家文章・巻二）の場合においても、道真が詩作を、敏行が浄書を、金岡が図画を担当していることが知られる。

道真は当時の依頼を受け、紀長谷雄の抄出した「本文」を前にして、「且つは挑げ、且つは草す」、燈心を挑げては、詩作していった

という。このように一夜を徹して出来上がったものが、巻五に収載するこの五首なのである。

道真自身この記序の末尾において、叙上の事情を「若し詳録せずんば、意を得べきこと難し」と述べているように、これらの詩は当然のことではあるが、能有の五十賀詩である成立事情を外しては、その真意は解せないと考える。

そこで本稿ではこの屏風画詩五首について、その方法と寛平七年という年に源能有のために制作されたという事情とを考え合わせるることによって、その持つ意味を考察して行きたい。

一 「本文」について

この五首の詩には、記序に「題脚に且た本文を注し、他時に其の疑惑を断たんとす」とあるように、第一首目の「廬山異花詩」を除き、題下に紀長谷雄が抄出したという「本文」が割注で注記されている。これらの「本文」をそれぞれの原典と比較してみると、ある限定された枠内からの引用であることが分かる。つまりいずれもが典型的な神仙説話なのである。ここではまずこの「本文」の提出する問題を原典との比較作業を通して見ておきたい。

第一首目の「廬山異花詩」³⁸⁶のみは題下に「本文」の注記がない。川口久雄氏が「何かの理由で脱落したのであろう」（古典大

系・補注七〇九頁）といわれる通りであると思われる。川口氏はこの「本文」の出典を「ぴったり合うものを索出しえない」（補注七〇九頁）としながらも、「神仙伝」巻六にみられる廬山の董奉伝に関連を求められた。ところが近年、新聞一美氏によってこの「本文」の出典としてふさわしい説話が見出された。それは次に掲げる「法苑珠林」巻三十六（華香篇）所引の「述異記」である。

述異記曰、昔有_レ人_レ發_二廬山_一採_レ松。聞_二入語_一云、「此未_レ可_レ取」。此人尋_レ声而上。見_一一異華形甚可_レ愛。其香非常。知_二是神異_一。因_レ掇而服_レ之、得_二壽三百歲_一。

「述異記」は「隋書」経籍志などに齊の祖冲之撰、十卷とあるが、現在は散佚しており、魯迅「古小説鈎沈」に輯佚されている。

廬山で、恐らく神仙の修行中の道士と思われる人物が、仙薬の一種とされる松子を採集中に異常な香を発する花を見付け、それを服すと三百歳の長寿を得たという。『太平御覧』巻九九六（百卉部・紫草類）などにも同様の型がみられる説話である。新聞氏も指摘される通り、道真詩の「二百春」とこの「三百歳」との違いはみられるものの、「廬山」という地名、松子を採集中という状況設定、長寿をもたらす「異花（華）」という主題などの一致を考えると、この説話をこの詩の「本文」とみるべきことは動かないものと考えられる。この「本文」の発見によって、一例を挙げれば、川口氏注に

よつて「未詳」とされた第二句「廬山独立採松人」などはきわめて、容易に理解し得るようになったのである。

次に二首目の「題 吳山白水 詩 387」の「本文」は、前漢の劉

長谷雄の抄出した「本文」は「芸文類聚」所引本と近似するのである。

次に三首目の「劉阮遇 溪辺二女 詩 388」であるが、この「本

向撰といわれている「列仙伝」よりの引用である。呉にいた鏡磨きの

文」は日本の浦島伝説とも通底する、宋の劉義慶撰の「幽明録」に

の道具箱を背負つた神仙、負局先生が蓬萊山に還去するにあたり、

所載の著名な天台山淹留譚である。漢代、劉晨・阮肇の二人が天台

仙薬を地上の人に与える説話である。「列仙伝」三巻は現伝してい

山で道に迷い、溪辺で二女に逢う。二女の款待を受け、半年にて帰

る。ただし表Ⅰにみられるように、現伝本の「列仙伝」巻下のテキ

郷してみると、そこには昔日の面影はなく、ただ七世の孫に逢つた

スト（「郝氏遺書」所収の王照円「列仙伝校正」巻下による）と

という説話である。「隋書」経籍志に二十巻と記載のある「幽明録」

「芸文類聚」巻七十八（靈異部上・仙道類）所引本とを比較してみ

の原本は現在伝わらず、魯迅「古小説鈞沈」に二六五種の佚文が輯

ると、傍線を付した「世世」、「流」、「所」などの措辞において、紀

佚されている。この説話は「法苑珠林」卷三十一（潜遁篇）、「芸文

表Ⅰ

【列仙伝】	【芸文類聚】	【晋家文章】
<p>負局先生者、不知何許人也。語似燕・代間人。常負磨鏡局、徇吳市中、銜磨鏡一錢、因磨之、輒問、主人得無有疾苦者。輒出紫丸藥以与之、得者莫不。如此数十年、後大疫病、家至戸到、与藥活者万計、不取一錢。呉人乃知其真人也。</p> <p>後止呉山絶崖頭、懸葉下与人。将欲去時、語下人曰、「吾還蓬萊山、為汝曹下神水。」崖頭一旦有水白色、流從石間来下。服之多疾。立祠十余処。</p>	<p>負局先生、語似燕・代間人。因磨鏡、輒問主人得無有疾苦者。若有、輒出紫丸赤藥与之。莫不。数十年後、大疫、每到戸与藥、者万計、不取一錢。</p> <p>後止呉山絶崖、世世懸葉与人、曰「吾欲還蓬萊山、為汝曹下神水」。崖頭一旦有水白色、從石間来下。服之多所。立祠十余処。</p>	<p>列仙伝曰、負局先生、上呉山絶岸、世世懸葉、与下人。欲去時、語下人曰、「吾欲還蓬萊山、為汝曹下神水岸」。一旦有水白色、從石間来下。服之、多所。</p>

類聚」卷七（山部上・天台山類）、「太平御覽」卷四十一（地部・天台山類）、同卷九六七（果部・桃類）などに「幽明録」として収載されているが、そのなかでもほとんど細部にわたって一致するのが次に掲げる「法苑珠林」所引本である。

漢永平五年、剡県劉晨・阮肇共入天台山、迷不得返。經十三日、糧之尽（飢餒殆死）。遙望山上、有二桃樹、大有三子実。（水無登路。）攀緣藤葛、乃得至至上、各啖数枚、而飢止（体充。復下山、持杯取水、欲盥嗽、見蕪菁葉從山腹流出上。甚鮮新。復一杯流出、有胡麻飯糝。便共没水逆流、行二三里、得度山出。）一大溪辺。有二女子。（姿質妙絶、見二人持杯出、便笑曰、「劉・阮二郎、捉向所失流杯上来」。晨・肇既不識之、緣女便呼其姓、如似有旧、乃相見而悉問、「来何晚」。因邀還家。其家銅瓦屋、南壁及東壁下各有三大床。皆施絳羅帳、帳角懸鈴。金銀交錯、床頭各有十侍婢。勅云、「劉・阮二郎、經涉山岨、向雖得瓊実、猶尚虚弊。可速作食」。食胡麻飯・山羊脯・牛肉、甚甘美。食畢行酒。有二群女来、各持三五桃子、笑而言、「賀汝婿来」。酒酣作樂。至暮、令各就一帳宿、女往就之。言声清婉、令人忘憂。遂停半年。氣候草木是春時、百鳥啼鳴。更懷悲思、求帰甚苦。

女曰、「罪牽君、当可如何。遂呼前来」女子、有三四人集会、奏樂共送劉・阮、指示還路。既出、親旧零落、邑屋改異。無復相識。問訊得七世孫。（伝聞上世人山、迷不得帰。至晉太元八年、忽復去、不知何所。）いささか長い説話なので、「菅家文章」においては、今、丸括弧を付した箇所を「云々」として適宜中略している。

なお、この中略は道真が「菅家文章」編纂時に行ったものと考えられる。というのは、詩の三句目の「素意」とは、抄出「本文」において中略されている、出典の傍線を付した「二女便ち其の姓を呼ぶこと旧有るがごとし」によっており、予てからの宿縁をいうものであり、「旧意」の意である。ここは次句の「黄昏」との色対のために、「素意」としたものである。また四句目の「綺羅の帳裏」は、同じく傍線を付した「皆絳き羅帳を施す」によっている。ということは、道真が詩作する時点で、目前においた長谷雄の抄出した「本文」は全文が存したのであるが、道真が「菅家文章」編纂にあたって、あらずしが理解できる程度に中略したものと考えられるのである。

次に四首目の「徐公醉臥詩 389」の「本文」にうつる。これは宋の劉敬叔撰になる「異苑」からの引用という。東陽の徐公が長山の湖水の辺で二人の神仙に会い、その壺酒を飲み二年間眠り続けた後

に帰宅したという説話である。『異苑』十卷は明の『津逮秘書』や清の『学津討源』所収本が現存するが、表Ⅱにみられるように、これらの現伝本は非常に簡略化されたテキストになってしまっている。実はこれも二首目の「題三呉山白水詩」の場合と等しく、『芸文類聚』巻九（水部下・湖）に「鄭縉之東陽記」として引用するものに措辞においてもよく似ている。しかしこの場合は、抄出「本文」の「猶自飢えず」が、現伝本『異苑』の「常に食わずとも亦た饑えず」に対応しているのに対して、『芸文類聚』所収「鄭縉之東陽記」には対応する箇所がみあたらないことから、『芸文類聚』所引本が直接の典拠ではないことも明らかである。したがってこれも現伝本とは系統を異にする『異苑』テキストが存したのであろうが、現在のところ見出し得ない。

表Ⅱ

<p>【異苑】巻五（津逮秘書本）</p> <p>東陽徐公居在長山下。常登嶺。見二人坐於山崖對飲。公索之、二人乃与一小杯、公飲乃遂醉。後常不食亦不饑。</p>	<p>【芸文類聚】</p> <p>鄭縉之東陽記曰、北山有湖。故老相伝云、其下有居民、曰徐公者。常登嶺至此處、見湖水湛然。有二人共博於湖間。自称赤松子・安期先生。有一壺酒。因酌以飲徐公、徐公醉而寐其側。比醒、不復見二人、而宿草攢蔓其上。家人以為死也。喪服三年、服竟、徐公方反。今其処猶為徐公湖。</p>	<p>【菅家文章】</p> <p>異苑曰、東陽徐公、居長山下。嘗見二人坐於山岸水側。自称赤松・安期先生。有壺酒、因酌以飲徐公、醉而臥其側。比醒不復見人而宿莽攢蔓其上。家以為死、治服二年、竟、徐公方歸。云、「酒勢雖除、猶自不飢」。至今名其処為徐公湖也。</p>
<p>五首目の「呉生過三老公詩」390の「本文」は一首目と同じく齊の祖冲之撰『述異記』からの引用である。晉の呉猛が廬山の三石梁で神仙と談笑したという説話である。先に述べたように『述異記』は現伝しないが、この説話は『法苑珠林』巻三十一（潛遁篇）、『太平御覽』巻四十一（地部・廬山類）、同巻六六三（道部・地仙類）などに『述異記』として引かれている。そしてここでも最もよく抄出「本文」と一致するのは、三首目の場合と等しく、次に掲げる『法苑珠林』所引本なのである。</p> <p>述異記曰、廬山上有三石梁。長數十丈、広不盈尺。俯眺杳無底。咸康中、江州刺史庾亮迎呉猛。猛將弟子、登山遊觀。因過此梁、見一老公。坐桂樹下、以玉杯承甘露、与猛。猛遍与弟子。又進至一處、見崇台広</p>		

廈玉宇金房^レ、琳瑯焜輝、暉彩眩^レ目。多^レ珍宝玉器、不^レ可^レ識^レ名。見^レ數人^レ与^レ猛共言^レ、若^レ旧相識^レ。設^レ玉膏終日。

以上の「本文」の出典との比較によって、抄出「本文」の校訂の資料がいくつか提出される。三首目、「菅家文章」諸本が「剡懸」に作る箇所は出典により三手文庫本傍書の「剡原」を是とすべきであり、五首目、「菅家文章」板本などが「成康中」に作る箇所も同様に内閣文庫林道春本の「成康中」を是とすべきである。また「菅家文章」諸本が一致する本文であるが、出典により訂すべき箇所として、三首目の「漢永和」、五首目の「広盈尺」があり、それぞれ出典により「漢永平」、「広不盈尺」に改めるべきところである。四首目の「治服二年」は出典のように「三年」とありたい箇所ではあるが、詩の二句目においても「徐公一飲二年帰」とあるので、一概に誤写とはいえない。一首目の「二百」と「三百」との場合と同じく、異伝のテキストの存在を仮定する方が妥当であろう。

さらにここで出典との比較において、注目しておきたいことは五首の内、三首までの「本文」の出典が現在、「法苑珠林」に見出されることである。しかも勝村哲也氏によって、一首目の出典として掲げられた「法苑珠林」の当該箇所が、北齊の類書「修文殿御覽」卷三百一（香部・神香類）の、同様に五首目の出典として掲げられた「法苑珠林」の当該箇所が、「修文殿御覽」（靈異部・地仙

類）の、それぞれ佚文であることが明らかにされたのである^③。しかも「法苑珠林」においては、三首目の「幽明録」は五首目の「述異記」の引用の直前に位置している。したがってこの二つの佚文に「靈異部・地仙類」としてのまとまりをみることができる。二首目・四首目の場合についても「法苑珠林」にはみられないもの、なんらかの類書によった形跡は認められたのであった。以上のことから、長谷雄の抄出したこれらの「本文」は一一の書物によったのではなくして、「修文殿御覽」とまではいえないにしても、それに類した書物によって、五十賀にふさわしい「靈寿」の典型を抄出したものと考えるのが妥当だと考えるのである。

二 道真の題画詩の方法

それではこのような典型的な神仙の「本文」を前にした道真はどのような詩作を試みたのであろうか。次に五首の題画詩の表現に即してこの問題をみておきたい。まずその五首の詩作を訓読文とともに掲げておく。なお作品番号の上に、私に記号を付し、題下割注の「本文」は削除した。

A 386 廬山異花詩

何処異花触目新 何れの処ぞ異花目に触れて新たなる

廬山独立採松人 廬山に独り立てり松を採る人

煙霞不記誰家種 煙霞は記さず誰が種えしかを

水石相逢此地神 水石は相逢う此の地の神しきに

吹送馨香風破鼻 馨香を吹送し風は鼻を破る

養来筋力気関身 筋力を養来し気は身に関わる

一殮算計前程事 一殮算計す前程の事

珍重童顔二百春 珍重す童顔二百の春

B 387 題吳山白水詩

吳山神水石問来 吳山の神水は石問より来たる

看是孤雲澗口開 看るに是れ孤雲澗口に開く

欲見多年懸葉処 多年葉を懸けし処を見んと欲すれども

空留一眼*去蓬萊 空しく一眼を留め蓬萊に去る

C 388 (*眼字蓬左文庫本作服字、三手文庫本傍書脉歟。)

劉阮遇溪辺二女詩

天台山道道何煩 天台山道道何ぞ煩わしき

藤葛因縁得自存 藤葛の因縁にて自ずから存すること得たり

青水溪辺唯素意 青水の溪辺唯だ素意のみ

綺羅帳裏幾黄昏 綺羅の帳裏幾黄昏ぞ

半年長聴三春鳥 半年長に聴く三春の鳥

帰路独逢七世孫 帰路独だ逢う七世の孫

不放神仙離骨録 神仙をして骨録を離れしめずんば

前途脱履旧家門 前途脱履せん旧家門

D 389 徐公醉臥詩

自到東陽道不違 自ら東陽に到りて道違わず

徐公一飲二年帰 徐公一飲して二年にして帰る

赤松計会新来客 赤松計会す新来の客を

玄草纏綿旧著衣 玄草纏綿す旧著の衣に

壺酒浅深初得意 壺酒浅深初めて意を得たり

醉郷遠近惣忘機 醉郷遠近惣べて機を忘る

無情湖水誰遺迹 無情の湖水誰が遺迹ぞ

憶昔長山臥翠微 憶う昔長山翠微に臥す

E 390

吳生過老公詩

山頭不倦立煙嵐 山頭倦まず煙嵐に立つ

幸甚神人許接談 幸甚なり神人接談を許す

念念逢時丹桂一 念念逢う時丹桂一つなり

行行見処石梁三 行行く見見る処石梁三なり

生涯養性年華美 生涯性を養いて年華美し

逆旅知恩曉露甘 逆旅恩を知りて曉露甘し

傾蓋如今為旧識 蓋を傾け如今旧識と為る

誰辞竟夕玉膏酣 誰か辞せん竟夕玉膏酣なることを
まずA詩において、その第八句「童顔二百の春」の部分、源能

有の長寿に対する祝辞と考えられる。このような祝意を含んだ表現はB・C・Dの各詩にはみられないが、五首目のEにおいては認めることができる。Eの五句目「生涯性を養いて年華美し」は表面上はもちろん呉猛が逢った神仙たる老公のことをいうのであるが、能有五十賀詩であることを考えた時、能有の若々しさを称揚する詩句と読めるのである。このように最初と最後の詩に五十賀詩としてふさわしい祝意の表現を含まれていることが看取できるが、このことと関連をもつと考えられる表現がやはり、A・E両詩にみられるのである。すなわち、Aの第八句「珍重」は、張相「詩詞曲語辭匯」卷六に「猶云仔細或保重」というように書信中において相手のことを気遣う語である。さらに、Eの第二句の「幸甚」も、羅竹風氏主編『漢語大詞典』に「書信中習用語。有表示殷切希望之意」とあるようにやはり、書儀語なのである。このような書儀語の使用は源能有に対する直接的な語りかけの口吻を表すものと考えることができ、このように祝意と書儀語が最初と最後の詩だけにみられることから、最初と最後の詩によって、この五首が能有に対する五十賀詩である枠組を設定していると推測されるのである。

道真の題画詩一般の特徴について、安藤太郎氏は次の五点を挙げられる。

- ① 道具の題画詩には画師の讚美が見られない。

② 画と実物の相違を問題とした趣向の詩は見られない。

③ また、画の不変恒常性を問題とした詩も見出されない。

④ 画中人物になつての表現がしばしば見られる。

⑤ 老莊儒仏の文献を踏まえ思想的である。

本題画詩においてももちろんこれらの特徴は当てはまるのであるが、本題画詩には安藤氏の挙げられた④の特徴に止まらず、さらに表現主の主體的表現ともいべきものがみられる。すなわち、Bの三句目「見んと欲す」は絵を見る表現主の立場であり、またDの第八句目「憶う昔」とあるのも、表現主の行為であることは自明であろう。このように本題画詩においては、より直截的な主體的表現が見出されるのである。このことは、後藤昭雄氏が昌泰二年（八九九）の制作にかかると「近院山水障子詩。六首 462-467」（菅家文章・卷六）について、「障子詩という他律的動機に基づく詠詩でありながら、詠懐詩となり得ていることによって、『近院山水障子詩』は平安朝の題画詩の系譜に一つの画期を作る」とその述懐性を認められていることに符合する。

青木正児氏は画讀と題画詩との相違を論じて、「画讀の客観的叙述は単に其の図題に対して説明の用を為すに過ぎず、縦ひ其の間讀美の辞もあるも、其の辞は其処に画かれたる人物等の徳を美とするに止まり。然るに題画詩に至りては単なる説明に止まらずして之に

議論を加へ、又往々画者の芸術を評論し讚美^⑥すると述べられた。

すると、道真の題画詩にみられる、画に触発されて、しかも画を離れ自己の感慨を叙する特徴は、青木氏の述べられた唐代題画詩一般の特徴とは非常に異なるものである。このことは五十賀のため制作されたという特殊性は考慮しても、看過できない問題と思われる。

道真の題画詩には本五十賀屏風画詩や「近院山水障子詩」を始めとして、神仙・隠逸をその題材とするものが多い。そこで、私は道真の本題画詩の特徴は、これらの詩群を題材の上で共通する遊仙詩と対照してみるにより、その意味を明らかにできると考えるのである。

すなわち、道真の本題画詩の方法は、晉の郭璞の「遊仙詩七首」(文選・卷二十一)にみられる方法と類似していると考えるのである。郭璞の「遊仙詩」がその結句において彼のいわんとする感慨をまとめる点において、それ以前の曹植や張華らの遊仙詩と著しく相違することは、既に船津富彦氏によって明らかにされている。今試みに郭璞「遊仙詩」の結びの一聯ばかりを抜き出してみると、次のようである。

借問蜉蝣輩 借問す蜉蝣の輩

寧知龜鶴年 寧んぞ龜鶴の年を知らん

(其の三)

臨川哀年邁 川に臨みて年の邁くを哀しみ
撫心独悲吒 心を撫して独り悲吒す

(其の四)

悲来惻丹心 悲しみ来たりて丹心を惻ましめ
零淚綠纓流 零涙は纓に緑りて流る

(其の五)

これらはいずれも神仙郷に対する憧憬などではなく、むしろ神仙観に触発されての、現状に対する悲憤の情を詠み込んだものになっている。郭璞の「遊仙詩」群は決してたんなる仙界の描写に終始する遊仙の文学ではなく、林田慎之助氏によつて「現実の矛盾と屈辱にげしく拮抗する内面衝動を詩的想像世界において解放しようとしている」^⑦と説明されるものである。道真の題画詩も、清の沈德潜が「古詩源」卷八において「遊仙詩本有託而言「坎壈」。詠懷其本旨。鍾嶸貶其少三列仙之趣。謬矣」と述べている郭璞の「遊仙詩」とその方法を同じくするものと考えられるのである。もちろん道真の五十賀屏風画詩にその主題の上で「坎壈」つまり志を得ないで不遇なさまを看取し得るはずがない。ここで強調しておきたいことは、方法における両者の相同性である。遊仙詩も題画詩もその対象とするものを客観的に、または即して描出することを一般

とするのである。しかし郭璞も道真もその枠を踏み越えて、特にその末尾において自己の詠懐を神仙に触発されて述べるという相似た方法を持つのである。

三 神仙不在の認識

道真のこの題画詩が郭璞の「遊仙詩」と等しい方法を持ちながら、郭璞の場合のように現実に対する悲憤の情が見出せないとすれば、道真詩はこの方法によりながら、何を能うに語りかけようとしたのか。そこでもう一度注目しておきたいことは、一節で述べたように、これらの道真詩は典型的な神仙説話である「本文」を前提として、詩作されていることである。これら典型的な神仙説話に対する道真の態度が、とりもなおさず前節で述べた、結尾の方法によって表白されているのである。それでは本題画詩においては「神仙」はどのように扱われているのであろうか。

まずD詩の尾聯の表現に注目したい。「無情の湖水誰が遺迹ぞ、憶う昔長山翠微に臥す」の尾聯は二節において表現主の主体的表現がみられる箇所として挙げたものである。ここでさらに留意しておきたいのは、表現主の眼前には神仙の「遺迹」たる「無情の湖水」のみが存し、神仙の存在は「昔」のこととしてただ「憶」われるのみであるという表現である。このように一首の結びの句で、表現主

の態度を表白するにあたり、五十賀詩としては一見ふさわしくないように思われる、現在における神仙の不在を述べているのである。

このような神仙に対する認識は、D詩だけではなく、B詩の第三句・第四句、C詩の第七句・第八句、つまり両詩の結びの部分においてもやはり看取し得るのである。B詩の第四句目「一眼」は注記しておいたように、本文の異同が存する。薬に關わるので「一服」、また神水が石間より下り落ちることから「一脉」などのテキストが存するのであるが、ここはやはり「空留」の措辞から考えて、泉などが湧き出る小穴をいう「眼」であろう。すなわちかつてそこから湧き出ていた神水も、今はただ「空」しく「一眼」を「留」めるのみであるというのである。この詩においても「見んと欲すれども空しく留む」の措辞によって眼前つまり現在における神仙の不在が詠まれているのである。

C詩においても事情は同じであると考えられる。ただこの尾聯は難解であるが、第七句の「放」を張相「詩詞曲語辞匯釈」巻一の「放、猶教也。使也」に従って、使役の助字と考えておく。中唐の張籍「寒食内宴詩」に「千官尽醉猶教_レ坐、百戲皆呈未_レ放_レ休」などとみられるのがその例である。さらに第八句の「脱履」も問題である。この語はたんなる草履を脱ぎ棄てる意としてではなく、その意から物事を軽視し、棄て去ることの比喻として使われることが多

い。とすると、ここでも故郷の家を棄て去る意として使われているものと考えられる。このように考えると、この二句の意は、もし「神仙」つまり二人の仙界に参入した男を仙人の骨相から離さなかつたならば、彼らも神仙として故郷の家のことなど気にもとめなかつたろうになあ、とでもなるのである。この詩には表面上は表現主の主体的表現はみられないが、「不放」を今のように訓めば、使役の仮定表現によって、表現主の反実仮想的詠嘆が含まれるものと考えられる。したがってこの詩においても、結果的に神仙になり得なかつたという神仙の不在が、結びにおいて表現主の詠嘆とともに詠まれているのである。

以上のようにB・C・Dの各詩にはいずれも二節で検討した方法によって、現在における神仙の不在の認識ともいうべきものが詠み込まれているのである。このことは実は郭璞の「遊仙詩」の二首目の結びに既にみられていたのである。

蹇脩時不存 蹇脩は時に存せず

要之將誰使 これを要むるに誰をか使わさんとする

郭璞においては、その現状に対する悲憤の情を述べるのに、このような表現が認められることは必然的でさえある。しかし道真の場合には五十賀屏風画詩である点に不可解さが残るのである。

ここで思い到るのが、卷三・四のいわゆる「讃州客中詩」の棹尾

を飾る「莊子逍遙遊詩三首 333-335」（仮称）の存在である。この詩群が「詩言志」の詩人道真において持つ意味は、藤原克己氏的^⑨ 確な論究が存する。ここでこの詩群について詳論するいとまをもはや持たないが、私は道真自身が「莊子」の解釈を督の郭象注によらず、唐の成玄英疏によっていることをあえて言明している点に注目したいと考えるのである。一般に成玄英疏は郭象注の忠実な祖述と考えられているのであるが、道真が利用している箇所について言えば、重大な差異が存する。六朝という時代状況に即した郭象は、自己の聖人化を企図したの^⑩ 対して、成玄英は聖人と賢人との二者別途のあり方を措定しているのである。道真はこの成玄英疏によって、聖人と賢人との二途があり、聖人による用賢政治を理想的政治として提起しなかったのではないだろうか。寛平二年（八九〇）、讃岐より帰京した道真は「閑客」という立場を利用して、彼の政見をこの三首の詩に託したのである。

源能有五十賀屏風画詩における不可解ともみえる、神仙不在の認識も、この道真の理想的政治の実現の過程におけるものと考えるところによって理解し得るのである。現実の世界において理想的政治を具現させようとしている彼にあっては、神仙の理想郷は彼岸のものとして観念的に相対化されてしまっているのである。

一方、紀長谷雄には、渡辺秀夫氏が「長い沈淪不遇の中に幻怪の

世界に踏み入り家伝製作の意識を基調として志怪を収集し、さらに神仙物の典型を模倣、再構成して『白箸翁』をも記^①したと述べられるように、神仙に対する憧憬が容易に看取し得る。この長谷雄が抄出した典型的な神仙に対して、道真は自己の政見に基づく神仙認識を、「遊仙詩」の方法によりB・C・Dの三詩に託して、能有に伝えようとしたのである。

四 寛平の治の中で

この寛平七年の時点における源能有については、いまさら喋喋すべきことはないが、彼は宇多天皇がその死を聞いてことばがでなかつた（寛平御遺誠）ほど、信任していた朝臣であり、寛平の治のブレンであったことは諸史家の説くところである。たとえば森田悌氏は「能有は寛平の治の最大の演出者であり、宇多天皇のブレンであった^②」と位置付けられているのである。

この能有の五十賀にもう一人の寛平の治の柱であった道真が贈った詩群であること念頭におくと、能有・道真ラインによる理想的政治の実現への確認が看取れるのではないだろうか。

五首目、最後の詩において道真は、神人を能有に、呉猛を道真自身にたとえ、この二人の「幸甚」なる逢会によって、「玉膏酣なること」つまりこの理想的な用賢政治が持続することを含意してこの

詩群を結んでいると読みとることができよう。

注

- ① 『菅家文章』の引用は寛文七年刊本により、川口久雄氏校注『日本古典文学大系 72』（岩波書店、一九六六）において設定された作品番号を付す。
- ② 新間一美氏「源氏物語と廬山——若紫卷北山の段出典考——」『甲南大学紀要 文学篇』52号、一九八四。
- ③ 勝村哲也氏「修文殿御覽 新考」『鷹陵史学』3・4号、一九七七。
- ④ 安藤太郎氏「平安時代私家集歌人の研究」（桜楓社、一九八二）二五一頁—二五二頁。
- ⑤ 後藤昭雄氏「平安朝漢文学論考」（桜楓社、一九八一）二四一頁。
- ⑥ 青木正児氏「青木正児全集」第二卷（春秋社、一九七二）四九六頁。
- ⑦ 船津富彦氏「郭璞の遊仙詩の特質について」『東京支那学報』10号、一九六四。
- ⑧ 林田慎之助氏「中国中世文学評論史」（創文社、一九七九）二五七頁。
- ⑨ 藤原克己氏「平安朝の知識人——文章道と菅原道真」『講座日本思想』第二卷、一九八三。
- ⑩ 荒牧典俊氏「魏晉思想と初期中国仏教思想——序——」『東方学報』47冊、一九七四。
- ⑪ 渡辺秀夫氏「紀長谷雄について——神仙と隠逸——」『日本文学』25巻8号、一九七六。
- ⑫ 森田悌氏「王朝政治」（教育社、一九七九）九〇頁。